
存在

らいらいさん（風）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

存在

【Zマーク】

Z2405P

【作者名】

りこらこわん（風）

【あらすじ】

読んだ後にもう一度読みたくなつたら俺の勝ち

(前書き)

恥ずかしながら星新一をイメージしてみました。

世界的に名の知れた数学者のエフはとある石橋の真ん中で手すりに背もたれながら、そこから見える景色をぼんやりと眺める。だがエフの頭の中では作者を含める一般人には到底理解できない数式が組みあがっては消え、消えては組みあがっていた。

時折下を向き、石畳を見つめる、それはエフなりの休憩であつた。ちょうどその休憩を見計らつたかのように、エフの良く知つた声が聞こえた。

「これはこれは、エフですか？」

顔を向けると、そこには彼の友人であり、同時に世界的に有名な科学者であるアイが居た。

「アイが、君もこっちは来たのだね」

アイはエフの問いに軽く頷くとエフの隣に移動し、彼と同じように手すりに背もたれた。

「ああ、つい先ほどね。どうかね？ 答えは出たかい？」

答え、という単語に対してもエフは深いため息をついた。

そして声のトーンを低くし、言ひ。

「私を含め多くの数学者はもう何十年もこの問題と対峙して来た、私のようにこの石橋に対するありとあらゆる数字を完璧に記憶してしまっている者だって居る、それが何を意味するか分かるかい？」

一日二十四時間、この橋の計算ばかりしているのを、それでも答えは出ない」

そう言つて再び景色をぼんやりと眺め始めたとしたエフをアイが慌てて止める、一度計算を始めてしまえば答えを出すか答えに詰まるかしなければエフは回りの話など聞こえなくなるのだ。

「それは私も同じだ、多くの科学者がこの橋に興味を持つている。石の材質、岸の土質、緯度、水質、過去に起こった地震の回数や規模、ありとあらゆる可能性を信じ、時には君を含める世界中のあり

とあらゆる数学者と協力し、ありとあらゆる仮説を立てた、だがそれのどれを実行しようと

「ああ、この橋は作り得ない、人が渡れる訳がない」

エフはそう言つた後憎憎しげに石置を踏みつける。

長さは僅か五メートルほど、微妙にアーチ上のこの石橋は、およそ一百年前に作られたものだ。

それ以来、多くの人間がその橋を利用し、その橋は壊れることなく人を渡し続けた。

何年か前にこの国が戦争を初め、この橋の付近には多くに爆弾が落とされた。それでもこの橋はビクともせず、時には兵隊を、時には救援物資を渡し続けた。

戦争が終わり、平和の象徴としてその橋を何らかの記念にしようと、そしてついでにこの石橋は何故これまでに頑丈なのかを調べようとして、数学者による測量が行われた、その結果、得られた結論は。『理論上、この橋は架かりえない』と言つ事。

一見何ともないように見えるこの橋の構造は、理論上不可能なものだったのである。

事実、この橋と全く同じ形をした橋は存在しない。どのように作つてもアーチを維持するだけで精一杯で、人が渡ろうものならばたちまち壊れてしまうのだ。

それ以来、ありとあらゆる数学者、科学者がこの橋を訪れた、勿論観光などではない、この橋の存在を理論的に証明するためだ。エフとアイもそれらの一人である。

だが、誰一人としてこの橋の存在を理論的に説明することは出来なかつたのである。

「数式と科学は、ありとあらゆる物事を理論的に証明して見せた」興奮した様子のエフにアイも続く。

「そもそも、黒死病の正体だって、飛行機が飛ぶ理由だって、クマバチの飛行方法だって、フェルマーの最終定理もすでにゴールに近い

「そう、それだから私は悔しい、このままでは死んでも死に切れない、これでは数式と科学の敗北だ、くそつ！ この橋さえ崩れれば大人気なく足を踏み鳴らすエフをアイが静止する。

「まあまあ落ち着け、暇つぶしが出来ていいじゃあないか、しかもこの暇つぶしは他のどんな暇つぶしよりもやりがいがあるぞ、もしかしたら我々が最も早くこの秘密を解明できるかもしれん」

そう聞いて、エフは少し落ち着いたが、それも少しの間だけで、今度は絶望したように言つた。

「それだけじゃ無い、もしこの橋の理屈を証明できたとしても今度は私たち自身の存在を理論的に証明しなくてはならない、数式と科学とは対極の存在にある私達を」

エフは透けて向こう側が見えているアイを指差し、次に同じように透けて向こう側が見える自分を指差して言つた。

アイは何だそんなこと、と笑い飛ばすとともに楽しそうに言ひはなつ。

「死後の暇つぶしが一つもあるとは中々贅沢じゃ無いか、それに俺はお前さえ居れば退屈することは無い、案外橋の問題は早く解決するかもな。それに安心しろ、これは憶測の話だが橋の問題さえ解決すれば俺達の存在はなくなる、つまりは成仏だな。なんてつたつてわざわざこの場所の自縛靈になつたんだ、俺もお前も、つくづく好き者だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2405p/>

存在

2010年12月1日10時57分発行